

短報 Short Communication

鳥取県におけるオニハマダイコンの西日本初となる  
定着記録と県内の分布状況

清末幸久<sup>1</sup>・浅井康宏<sup>2</sup>

<sup>1</sup>〒680-0011 鳥取市東町2-124 鳥取県立博物館

<sup>2</sup>〒261-8502 千葉市美浜区真砂1-2-2 東京歯科大学

<sup>1</sup>E-mail: kiyosuey@pref.tottori.jp

The first record of an alien plant species, *Cakile edentula* (Cruciferae)  
from western Japan, with notes of the current distribution in Tottori Prefecture

Yukihisa KIYOSUE<sup>1</sup> and Yasuhiro ASAI<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan

<sup>2</sup>Tokyo Dental College, Mihama-ku Masago 1-2-2, Chiba, 261-8502 Japan

**要旨**：2005年6月鳥取県東伯郡北栄町で西日本初記録となるオニハマダイコン（アブラナ科）が確認、採集された。継続観察の結果、当該地周辺における分布拡大も認められた。また、2006年7月には、当該地から約50km東方に離れた鳥取県岩美町内においても新たな定着が確認された。

**キーワード**：オニハマダイコン，外来種，分布拡大，鳥取県

■はじめに

オニハマダイコン *Cakile edentula* (Bigelow) Hook. (アブラナ科オニハマダイコン属) は北アメリカ東岸中北部原産の海浜植物で、日本国内への定着に際して筆者の一人浅井が和名を与えたものである(浅井1982)。

浅井は1981年に本種の存在を知り、翌年、日本国内はもとより東アジアで初めての確認地となった新潟県北蒲原郡中条町(現胎内市)新井浜付近で生育状態などの観察を行った。その際、本種が同地の砂浜海岸一帯に広範囲にわたって生育し、たくさんの種子をつけていることを認めた(浅井1991)。また、本種の存在はかなり以前から気づかれており、その正体が不明のまま、同地域の河口近くに見られることから、便宜的に「河口草」と呼ばれていた(工藤孝雄氏 私信)。

その後、1989年から1998年にかけて、新潟以北の日本海側各地で記録され、1999年にはオホーツク海沿岸の網走市で確認されている(図1; 阿部2005; 浅井1991; 土門1999; 榎本1995; 五十嵐2001; 狩山1999; 大森1987)。太平洋側では、1995年に北海道南部で記録された後、2003年までに北海道から茨城県までの各地で記録された(図1; 阿部2005; 浅井1996; 茨城

県維管束植物調査会2001; 伊東・湯澤2003; 狩山1999; 高橋1997; 内島2002)。

オニハマダイコンの種子は大型の果実が風や海水・海流によって運ばれ散布されることが知られており(浅井1993)、このような本種の分布拡大の状況について、伊東・湯澤(2003)は、日本海側では対馬海流によって北に運ばれ、太平洋に進出した後は、千島海流に乗って南に流れたものと推測している。一方、新潟より西の日本海沿岸では2006年に富山県射水市(大原ら2007)、2007年に石川県珠洲市(大原隆明氏 私信)で見つかっている(図1)。

筆者らは、これらの記録とは距離的に離れた鳥取県において、2005年から2006年に複数箇所でおニハマダイコンを確認・採集しているため、その状況を報告する。

■鳥取県におけるオニハマダイコンの記録

**事例1**：2005年6月13日、鳥取県東伯郡大栄町(現北栄町)の由良川の河口部左岸に発達した海岸砂丘地〔世界測地系メッシュコード：5333-2600〕で、西日本初となるオニハマダイコンを確認・採集した(標本：鳥取県立博物館収蔵、登録番号TRPM-PV-0001489)。こ

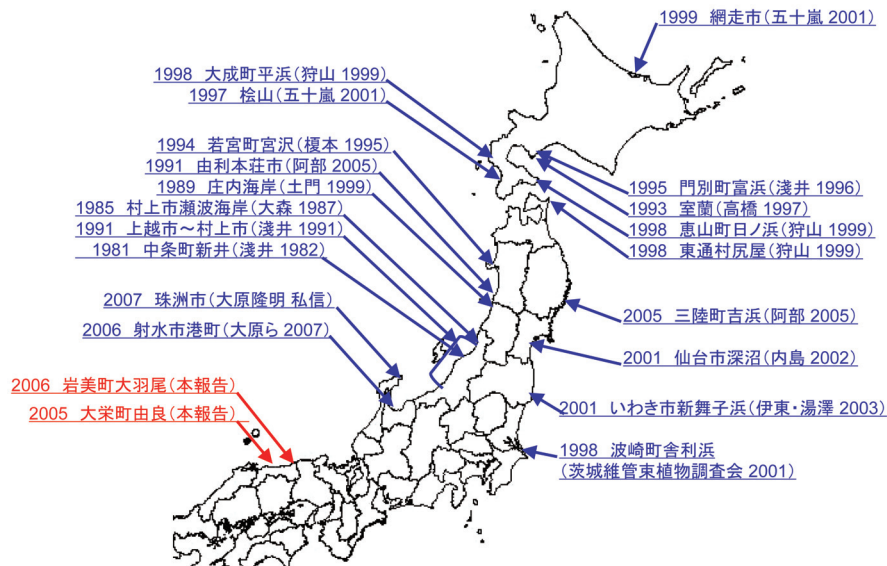


図1. 文献に見るオニハマダイコンの記録

確認された年、場所、文献の順に記載

の海岸砂丘は、河川からの砂の供給の減少に伴ってか、波による浸食を受けており、最大で約1mの段差を生じていた。オニハマダイコンは、段差の下側に発達したコウボウシバ、オカヒジキ、スナビキソウ、ハマヒルガオなどからなる草本のみの群落の中に20個体あまりが確認され、優占していた(図2)。さらにオカヒジキが好むようなもっとも汀線に近い環境にも出現していた。採集時には薄い桃紫色の花弁はほとんど残っておらず、未熟ながら特徴的な上下二節からなる合着した果実(蒴果)を付けた花序が大半であった(図3)。生育状態はきわめてよく、株の直径が60cm、高さが40cmを越える個体もあった。

事例2：翌年2006年も6月~7月にかけて継続観察した

ところ、由良川の河口部左岸では草本のみの群落のみならず、内陸側のハマゴウ群落へも侵入が認められ、個体数も推定200個体を超えていた。ただし、2005年に見られたような大型個体はなく、株の直径が30cm程度の個体が最も多く見られた。状況から、前年に結実した種子が日本海からの風によって吹き上げられ発芽した可能性がうかがわれた。前年には見られなかった由良川河口部の対岸でも38個体を確認され、侵入場所の近傍で生育面積を広げていた。

事例3：2006年12月3日には、北栄町西園海岸砂浜〔同メッシュコード：5333-2601〕で、オニハマダイコンの立ち枯れ状態の個体を発見・採集した(標本：鳥取県立博物館収蔵、登録番号TRPM-PV-0001492)。本地



図2. オニハマダイコン(赤枠内の大型の植物)確認地(大栄町由良海岸) 2005/7/28 撮影



図3. オニハマダイコンの花序